

使徒の働き14章1ー18節 「ローマ支配が離れたところで」

1A イコニオンでの忍耐の宣教 1ー6

1B ユダヤ人とギリシア人の信者 1ー3

2B 二派に分かれた騒動 4ー7

2A リステラでの奇跡と危機 7ー18

1B 足なえの癒し 7ー10

2B 使徒たちをあがめる群衆 11ー18

本文

使徒の働き 14 章を開いてください。私たちは、ピシディアのアンティオキアにおける、パウロとバルナバによる宣教を 13 章で見ました。パウロが、イエスが約束の救い主であることを宣言しましたが、次の安息日にはほぼ町中の人たちがやってきました。その群衆に妬みを抱いたユダヤ人が口汚く罵りました。二人は、自分たちは、異邦人のほうに向かうと言いました。異邦人たちは喜びましたが、信じないユダヤ人たちが、神を敬う貴婦人たちと、町の主だった者たちを扇動し、二人を迫害させて、その地方から追い出したのです。そして二人はイコニオンに向かったとあります。14 章は、その話から始まります。

今日は、14 章の前半を見たいと思いますが、初めはイコニオン、それからリカオニアのルステラという町での宣教を見ていきます。宣教は、ローマ帝国の支配があまり及んでいない地へと向かいます。ローマという帝国は、しっかりとした法体系があります。その法律が十分に行き渡っていない地域です。ですから、パウロとバルナバを迫害する時は、群衆が襲いかかって石打にするという、私(わたくし)による私刑を執行しても、問題にならないというものです。日本ならば、戦国時代みたいな状態で、どちらが強いかで物事が決まります。

しかし、パウロもバルナバも、福音というのは、すべての人に伝えるべきものであることを知っていました。「ロマ 1:14 私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。」とパウロが言っています。未開の人というのは、元々は「現地の言葉が離せない人」という意味ですが、ギリシア人が文化のない人、知識のない人という意味で、自分たち以外の人々を未開人と呼んでいました。そういった人々にも負い目がある、と言っています。

私たちも、どうしても自分たちに似た人々だけのことを考えますが、そうでない人々にも、福音は、信じる者に救いをもたらす、神の力なのです。そして、盗賊が出たり、群衆で襲いかかったりしても、それでも福音を伝える務めがあるということです。

1A イコニオンでの忍耐の宣教 1-6

1B ユダヤ人とギリシア人の信者 1-3

¹ イコニオンでも、同じことが起こった。二人がユダヤ人の会堂に入って話をすると、ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。² ところが、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人たちを扇動して、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。

「イコニオン」は、今はトルコのコンヤと呼ばれる町になっています。アンティオキアの遺跡から160 ㎞ぐらいのところ、車で二時間かかります。私たち夫婦は、2019 年 4 月のトルコ旅行で、カッパドキアからコンヤを経て、ピシディアのアンティオケに行きました。その辺りは、地中海の気候とは全く異なり、ずっと気温が下がります。標高 1000 ㍎ぐらいのところにあり、タウロス山脈の麓にある一帯です。トルコでも五本指に入る大きさの湖が二つあり、あまりもの湖水の鮮やかさと、延々と続く湖の大きさにうっとりなりました。

14 章は、大きな町アンティオキアから離れて、こうした田舎の中に入っていきます。当時のガラテヤ地方です。ここに住んでいた人々は、元来、黒海北部にいた人々がやってきたケルト人の一派で、ローマ時代は「ガウル人」と呼ばれていました。主にフランスの方面に移り住んだ人々ですが、この地域に分離して住み着いたそうです。紀元前 3 世紀には、ガラテヤ王国を作っています。今のトルコ人は、ウイグル人と同じ中央アジアから来た人々ですが、そのトルコに、髪の毛が赤毛で目がエメラルドグリーンの白人がいます。ガリア人の血が混じっているのかもしれません。

彼らは元来、騎馬民族で、馬と戦車をもって動いていました。エゼキエル書 38 章に、騎馬の大軍勢がイスラエルを攻めてくる幻がありますが、ガリア人がいたような地域からなので、当時の人々たちにとっては、とても身近な光景だったかもしれません。

そのこともあってか、当時はかなり粗暴な人たちがその地域を仕切っていたようです。ローマの帝国の中にあつたものの、盗賊も多く、治安が良くなかったと思われます。「盗賊の難」があつたことをパウロはコリント第二 11 章で言及していますが(26 節)、こういったところで経験したのだらうと思います。そのような困難の中で、なおのこと福音を伝えていきました。

1 節には、「同じことが起こった」と言っています。ピシディアのアンティオキアと同じことが起こった、ということです。つまり、ユダヤ人の会堂で話をしました。すると、大勢が信じました。そこにはユダヤ人だけでなく、神を敬う異邦人もいました。そして、信じようとしないうダヤ人たちが、異邦人を扇動します。この順序が同じだということです。前回学びましたように、神は、ユダヤ人に救い主を与えられました。けれども、ユダヤ人が拒みます。そのことによって異邦人に福音が届きます。

ここで、「ユダヤ人もギリシア人」と強調しています。会堂にさえ、周囲で聞いていたギリシア人

が目立っていたということです。ここに、教会の大きな特徴、すなわち、キリストにあって、ユダヤ人もギリシア人も一つなのだというものを見ます。「エペ 3:6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」

「信じようとしないうダヤ人たち」とありますね。信じられないのではなく、信じようとしません。心を頑なにし、信じることを拒んでいます。

そして、「異邦人たちを扇動し」とありますが、アンティオキアでも、神を敬う貴婦人を扇動していました。これは、ちょうどユダヤ人の宗教指導者たちが、イエスをローマの十字架につけるように要求した時に、煽った言葉と似ていることでしょう。「ヨハ 19:15-16 彼らは叫んだ。「除け、除け、十字架につけろ。」ピラトは言った。「おまえたちの王を私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」16 ピラトは、イエスを十字架につけるため彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。」ローマ皇帝に、カエサルに逆らっていると仕向けたわけです。テサロニケの町において、はっきりとした告発がなされました。「17:7-8 ヤソ³ンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と言って、カエサルの詔勅に背く行いをしています。」8 これを聞いた群衆と町の役人たちは動揺した。」

あるいは、既存の習慣を覆そうとしていると訴えることも、異邦人を巻き込むのに効果的です。ピリピの町においては、「16:20-21 そして、二人を長官たちの前に引き出して言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、21 ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」ユダヤ人こそが、これらの異教徒の慣わしに従わない人々のはずです。けれども、「ユダヤ人は、ユダヤ人。異邦人は異邦人。」という区別があったので、秩序は保たれていたのです。けれども、異邦人が自分たちの信仰に加えられていることに腹を立てているのです。それで、これはあなたがたの慣習や秩序を壊すものなのだと、積極的に言いふらしているのです。

³ それでも、二人は長く滞在し、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。

ここが、大きな言葉です。「それでも」という接続詞ですが、「そういうわけで」というギリシア語が使われています。兄弟たちに対して悪意を抱かせるような扇動をしているから、だから、ますます大胆に、主にあって語ったのです。

パウロはコリント人への手紙第一で、「16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています。反対者も大勢いるからです。」と言っています。反対があるということは、ちょうどパウ

口が迫害を始めて、その後に回心しましたように、人々がキリストに明け渡していく人々が多いからということでもあります。ですから、反対があるからと言って、恐れたり、ひるんだりすることなく、主が行われていること、その光に目を留めます。反対があると、どうしてもその悪ばかり見て、落胆してしまいがちです。しかし、人々が福音を信じていることを見ていくなれば、そこにいなければいけないとなります。主が言われていることをしっかりと行って、光となっている必要があります。

そして、ユダヤ人たち以上に、異邦人が信じる時は時間をかけないといけないでしょう。日本人が聖書をほとんど知らないから、信じたといっても、しっかりと、神のみことばを教えていく必要があります。そのためには、時間がかかります。私たちの教会には、すでに決心する用意が心の中で出来ている人々が教会にいらしたりします。なぜなら、すでにロゴス・ミニストリーのサイトによって、聖書の学びを始めている方々が多いからです。

そして、「主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた」とあります。主が広げたいと願われているのは、ご自分のことばです。その言葉の確かさを示すために、しるしと不思議を行わせます。「マルコ 16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」神のことばが、単にことばではなく、御力と御霊の現れであることを示します。

ここで大事なのは、「恵みのことば」です。受けるに値しない救いと祝福を受けているという、恵みのことばです。自分たちが努力をして、それで到達する義ではなく、むしろ、神がキリストにあってくださったこと、またしておられることについての、ことばです。ピシディアのアンティオキアでは、異邦人が、主のことばを賛美したとありますが(13:48)が、これまで除外されていたと思っていた異邦人が、救いにあずかる約束が、預言者によって語られたことを知ったからです。これについて、賛美しています。同じような恵みのことばを、続けてパウロとバルナバが語ったのでしょう。

2B 二派に分かれた騒動 4-7

⁴ すると、町の人々は二派に分かれ、一方はユダヤ人の側に、もう一方は使徒たちの側についた。

アンティオキアの時と同じように、町全体の人々が関わって来ています。二派に別れましたが、一方がユダヤ派です。これはユダヤ人だけでなく、信じようとしないうダヤ人に煽られた異邦人もいます。もう一方は、「使徒たちの側」であり、イエスこそがユダヤ人と異邦人を救う方であるとする人々です。つまり、これまでは民族的に、ユダヤ人と異邦人に分かれていましたが、今は、イエスを信じているかないかによって、二手に分かれているのです。

ところで、パウロとバルナバがここで「使徒」と呼ばれています。使徒とは、「遣わされた者」ということであり、アンティオキアにある教会から彼らは遣わされています。十二使徒がいますが、その

他に主が任命された使徒たちがいます。パウロは、自分の使徒職について疑いをかけている人々がコリントの教会にいるのを知って、次のように言っています。「Ⅰコリ 9:1 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。」使徒であることの資格として、主イエスを見たことを挙げています。三日目によみがえったイエスを見ていませんが、ダマスコに行く道で復活の主がパウロに現れてくださいました。それから、しるしと不思議を行うことです。「Ⅱコリ 12:12 私は忍耐を尽くして、あなたがたの間で使徒としてのしるしを明らかにしました。しるしと不思議と力あるわざによってです。」

このように、使徒と言っても、十二使徒だけではなく、遣わされている者で、イエスの御名にある力を示している人であれば、使徒の賜物が与えられていると言えるでしょう。そして、パウロの場合、異邦人に対する使徒として、他の十二使徒に劣ることはない権威が主から与えられています。

⁵ 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒にになり、二人を辱めて石打ちにしようと企てたとき、
⁶ 二人はそれを知って、リカオニアの町であるリステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、⁷ そこで福音の宣教を続けた。

ユダヤ人が扇動したのですが、今は異邦人が主導して辱めようとしています。ただ、石打ちにしようとしていますから、これはユダヤ人の死刑方法なので、ユダヤ人の知恵を得たのだと思います。ローマの実効支配がそれほど及んでいないので、こんなことができたのでしょう。

それを二人は知って、難を逃れました。困難がある時にそこに留まることが重要であると同時に、無駄に危険にさらさないと言う知恵も必要です。無謀に死を選ぶことは、みこころではありません。

しかし、神は彼らの避難をお用いになって、他の地域への宣教を広げられます。かつて、エルサレムの教会でステパノが殉教して、逃げていく聖徒たちによって福音が広げられたように、広がっていきます。大事なのは、それが、「リカオニア」という地方にある町々です。初めにリステラ、それからデルベ、そしてその付近の地方です。ガラテヤ地方の深みに入っていきます。

2A リステラでの奇跡と危機 7-18

1B 足なえの癒し 7-10

⁸ さてリステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。⁹ 彼はパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、¹⁰ 大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。

リステラは、イコニオンから南西 40 ㎞にあるところです。そこには、ユダヤ人の会堂がなかったのでしょう、会堂で宣べ伝えたという記述がありません。そこで、集まって来た人々に語ったと言う可能性があります。ユダヤ人がほとんどいない中で、しかも改宗者でもない人たちに対してですから、聖書の知識ありません。そんな人々に語っていました。

そこに、「足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。」とあります。かつての、神殿の「美しの門」にいた生まれつきの足なえのことを思い出します(3:2)。使徒たちは、ベテスダの池で 38 年間、足が動かない人をイエスが立ち上がらせたことを思っていたことでしょう。

ここで、パウロが、自分に与えられていた御霊の賜物のいくつかを用いている姿を見ることができます。まず、彼が「**パウロの話すことに耳を傾けていた**」とあります。みことばを、信仰をもって聞いているということが前提です。そこで、「**彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て**」とあります。ここで、パウロは「知識の言葉の賜物」が与えられていたのでしょう。主によって、人に起こっていることを教えていただく知識のことです。ペテロが、魔術師シモンが聖霊を授ける力を金で買おうとした時に、彼が苦みに満ちていたことを指摘しました。そういった心の中にあることを、物理的に、人間的には知ることができないことを、主に教えていただいた知識です。

そして、「**自分の足で、まっすぐに立ちなさい**」と言っています。大声で言っています。もしここで立たなかったら、パウロはペテン師です。けれども、起き上がるという信仰が与えられたのです。つまり、「信仰の賜物」をパウロはここで用いています。そして、この男のほうですが、「癒しの賜物」を受けています。彼が癒されるにふさわしい信仰があるということで、彼が癒しを受け取る賜物があります。そして、「**すると彼は飛び上がり、歩き出した**。」とありますが、彼が神の癒しを賜物として受けました。そしてパウロには、「奇跡を行う力」も与えられています。

パウロが、コリント第一 12 章で、御霊の賜物を列挙しているところを見てください。「12:8-10 ある人には御霊を通して知恵のことばが、ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」主は、必要なその時に賜物を分け与え、ご自分の働きをすることのできる力を与えられます。このようにして、聖書の知識が足りない人々にも、神のことばに力があることを示すことができました。

2B 使徒たちをあがめる群衆 11-18

¹¹ 群衆はパウロが行ったことを見て、声を張り上げ、リカオニア語で「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになった」と言った。¹² そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話

す人だったことから、パウロをヘルメスと呼んだ。¹³すると、町の入り口にあるゼウス神殿の祭司が、雄牛数頭と花輪を門のところに持って来て、群衆と一緒にいけにえを献げようとした。

パウロはギリシア語を話していて、この地方の人たちもギリシア語を解することができたと思いますが、ここでは彼ら現地に受け継がれていた言い伝えによるものであり、それで、現地の言葉で叫び始めたのです。初めは、パウロもバルナバも、何が起きているかよくわからなかったでしょう。

「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになった」と言っています。これは、ローマの詩人オウィディウスが「変身物語」というところで書き記していますが、こんなことが言い伝えられていました。「この地を神々の父ゼウスが息子のヘルメスを連れて旅人姿で訪れたが、村人は負たちを冷たくあしらった。ただ一軒の貧しい小屋に住むピレモンとパウキス夫婦だけが宿を貸し心から温かくもてなした。ゼウスとヘルメスは、この夫婦を山の頂上に連れて行き、村を湖底に沈めて滅ぼしてしまった。」このギリシャ神話の言い伝えを戒めとしていた人々が、バルナバとパウロが、ゼウスとヘルメスの再来だと思ったのです。

¹⁴これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて群衆の中に飛び込んで行き、叫んだ。

¹⁵「皆さん、どうしてこんなことをするのですか。私たちもあなたがたと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。

おそらく、宣教において、あらゆる困難の中でこれが最も大きな危機だったのではないかと思います。迫害を受けることよりも大きな危機、それは、神に用いられている器が祭り上げられてしまうことです。バルナバが主神のゼウスにされましたから、ここではバルナバが率先しています、人であることを示すためです。そして、「衣を裂いて」います。大祭司カヤパが、イエスがキリストであることを告白した時に、衣を裂きましたが、激しい感情を表す時にユダヤ人は行います。ここでは、自分たちはあなたがたと同じ肉体を持った人間なのだと訴えたのです。

彼らが人間に過ぎないことを知らせるために、神は敢えて福音書において、弟子たちの肉がいに弱かったのかを記させたのだと思います。使徒たちは、主の証しのためにしるしと不思議を行っています、彼らは弱き人間なのです。恵みによってのみ、使徒として立っているのです。

ペテロが、ユダヤ人からの視線に気づきました。生まれつき足なえの男を立ち上がらせた時です、「3:12 どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」そして、イエスによって与えられる信仰が、この人を立たせたと証言しました(16節)。そして、コルネリウスがペテロの前でひれ伏しました。ペテロは言いました、「10:26 お立ちください。私も同じ人間です。」主のしもべが、主の証しをしているので、まるで主であるかのように

祭り上げてしまうのですが、もしそれを受け入れたら、すべてが台無しになってしまいます。ヘロデ・アグリッパ一世がカイサリアで御使いに打たれて死んだのも、ルカは書き記しています。彼の演説を聞いている者たちが、「神の声だ」と言い始めたのです。「12:23 すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。」

そして、バルナバがこう言いました。「そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。」偶像礼拝から生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。パウロはローマ人への手紙で、偶像礼拝の空しさから福音を語っています。「ロマ 1:20-23 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」

私も思い出します、キリスト者になる前、美しい自然を見て、これがどうしても神々だと思えなかったのですが、それでもそう教えられていたのでそう信じようと思わせた自分がいました。ところが、すべてを神が造られたという真理を知って、今まで見ていた自然が全く異なる輝きを持っていました。自然は、神の栄光を現すために存在しています。それ自体が神々とするならば、パウロが言っているように、思いが空しくなり、鈍い心が暗くなっていくのです。

¹⁶ 神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました。¹⁷ それでも、ご自分を証ししないでおられたのではありません。あなたがたに天からの雨と実りの季節を与え、食物と喜びであなたがたの心を満たすなど、恵みを施しておられたのです。」

これまでの時代、過ぎ去った時代というのは、イエスを死者の中からよみがえる前の時代ということです。この方が神の御子であり、すべての人の主であることが明らかにされる前は、見逃しておられました。「ロマ 3:25-26 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。26 すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。」

けれども、証ししないでいたのではない。自分たちが恩恵を受けている雨と、それによって与えられた作物、その喜びが、神の恵みを証ししていると宣べています。難しい言葉で、後者を「一般恩恵」と言います。聖書に啓示されている特別な恵みは、「特別恩恵」とも言われますが、つまり、イエスこそが救い主であり主であるという知識に基づく恵みです。自然の中に、神の恵みが啓示さ

れているということです。

バルナバまたパウロの異邦人への宣教は、このように会堂におけるものとはかなり引き下がって、きわめて初歩的なことを伝える宣教でした。聖書抜きにしても、神が教えておられることを指し示して、そして天地創造の神がおられることを伝えるのです。そのことを知った上で、救い主を神が遣わされたことを伝えます。これは日本人への福音伝道に大きな示唆を与えます。一般に知られていることをもって、まことの神を指し示し、それからイエス様を宣べ伝えることです。初めから聖書知識のある人々ではないので、その基礎から教えていきます。

¹⁸ こう言って二人は、群衆が自分たちにいけにえを献げるのを、かろうじてやめさせた。

「かろうじて」というところに、バルナバとパウロがいかに苦心したかを感じ取れます。しかし、一難去ってまた一難です。次に、あの石打をするために、アンティオキアとイコニウムからやってきたユダヤ人がいるのです。法の行き渡らない、いわば無法地帯における宣教です。しかし、主はその苦しみにおいても救い出してくださいます。